



これは、核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）による報告書「核兵器が子どもたちに与える影響」（2024年8月発表）の概要の日本語訳である。英語版報告書全文は、[www.icanw.org/children](http://www.icanw.org/children) からダウンロードできる。

## 核兵器が子どもたちに与える影響(概要)

核兵器は、都市を破壊し、住民全体を殺傷するように設計されている。その中には子どもたちも含まれる。

核兵器による攻撃がなされた場合、それがもたらす熱線、爆風、放射線という影響に対して、子どもたちは大人よりも脆弱であるため、死亡したり重傷を負ったりする可能性が高い。また、子どもたちの生存は大人に依存していることから、核攻撃によって支援システムが破壊された後に、死や苦難に見舞われるリスクも高い。

1945年に米国が日本の広島と長崎の上空で（今日の基準でいえば）比較的小型の2発の核兵器を爆発させ、何万人もの子どもたちが犠牲になった。

数多くの子どもたちが、即座に灰と化し、また蒸発してしまった。他の多くの子どもたちは、火傷や爆風による負傷、急性放射線症で、数分後、数時間後、数日後、数週間後に、苦しみながら亡くなっていった。さらに数え切れないほどの子どもたちが、放射線に関連したがんやその他の病気で数年後、あるいは数十年後に亡くなった。白血病（血液のがん）は、とくに若い人に多く見られた。

広島と長崎の惨状は、終末を思わせるものだった。幼い少女や少年の死体が散乱する遊び場。生気のない赤ん坊を抱く母親たち。腹から腸が垂れ下がり、手足から皮膚がぶら下がった子どもたち。

爆心地の近くでは、数百人の生徒全員が一瞬にして亡くなった学校もあれば、数人しか生き残らなかった学校もあった。広島では、原爆投下当日の朝、何千人もの生徒が屋外で建物疎開（防火作業）に従事していた。そのうちの約6,300人が亡くなった。

偶然にも死を免れた子どもたちは、生涯を通じて身体的、心理的に深い傷を負った。1945年8月6日と8月9日、そしてその後の日々を目撃し体験したことは、彼らの記憶に永久に焼きついた。

何千人もの子どもたちが、両親や兄弟を失った。「原爆孤児」の中には、定員を超えた孤児院に入ることができず、街をさまよう者もいた。

原爆投下時に母親の胎内にいた赤ん坊の多くも、電離放射線にさらされた結果、障害を受けた。生後間もなく死亡したり、脳障害や小頭症などの先天異常をもったり、さらには、がんやその他の病気にかかったりするリスクが高くなった。

広島と長崎の妊婦は、自然流産や死産の割合も高かった。

## 核実験によって傷つけられた子どもたち

核実験による放射性降下物にさらされた世界中の地域社会で、子どもたちは、放射線による同様の被害を経験している。

1945年以来、核保有国は数十カ所で2000回以上の核実験を行い、放射性物質を広範囲に拡散させてきた。

一般住民の中でも、子どもと幼児は、電離放射線の影響を受けやすく、もっとも深刻な被害を受けている。幼い子どもは、放射線を浴びたときに、同じ線量を浴びた大人に比べて長期的には3倍から5倍もがんになりやすく、とくに女兒はその影響を受けやすい。

米国が67回の核実験を行ったマーシャル諸島では、子どもたちは空から降ってくる放射性灰の中で危険を知らずに遊んでいた。彼らはそれを、多くの核実験が行われた環礁の名にちなんで、「ビキニの雪」と呼んでいた。その「雪」が皮膚や目をやけどさせ、急性放射線症をすぐに発症させた。

核実験後数十年間、マーシャル諸島の女性たちは深刻な奇形児を異常に高い確率で出産した。生きて生まれても、数日しか生きられなかった子も多かった。なかには半透明の皮膚で、骨もわからない子もいた。人間として認識することが難しかったため、マーシャル諸島の人々は、彼らを「クラゲの赤ちゃん」と呼んでいた。

同じような話は、米国、カザフスタン、マオヒヌイ（タヒチ）、アルジェリア、キリバ

ス、中国、オーストラリアなどの核実験場の風下や下流に住む人々の間でも聞かれている。

## 核兵器を廃絶し子どもたちを守る

私たちには、広島と長崎で犠牲になった何千人もの子どもたち、そして世界各地で核兵器の開発や実験によって被害を受けた子どもたちを記憶し、尊重する、共通の道徳的責務がある。そして私たちは、子どもであれ大人であれこれ以上の犠牲者を出すことのないよう、確固たる決意と緊急性の意識をもって、核兵器のない世界という目標を追求しなければならない。

国際人道法および子どもの権利条約に基づき、各国政府は武力紛争における被害から子どもたちを守る法的義務を負っている。この義務を果たすためには、核兵器の惨禍を世界からなくすために、今すぐ協力することが不可欠である。

本報告書は、広島・長崎の子どもたちや、核実験場周辺に住む子どもたちの体験に基づき、核兵器が子どもたちにいかに独特な悪影響を及ぼすかを詳述するものである。彼らの生の証言や描写を通じて、核兵器が子どもたちの命や生活に与えた被害について紹介する。さらに、都市全体がいつ破壊されるかわからないという核戦争への恐怖が、世界中の子どもたちにどのような精神的被害をもたらしているかについても説明する。

最後に、国連の下でつくられ 2021 年に発効した画期的な核兵器禁止条約を通じて、核兵器を廃絶し、現在そして未来の世代の子どもたちを守るよう、すべての政府に緊急に訴える。

## 主な調査結果

核兵器が世界に存在する限り、再び使用される危険性は極めて現実的であり、現在、そのリスクは高まっている。

核兵器が使用された場合、何千人もの、おそらくは何十万人もの子どもたちが死傷者に含まれることがほぼ確実である。そして、子どもたちは、他の住民とは異なる形で、特異な苦しみを味わうことになる。

核兵器による攻撃がなされた場合、大人よりも子どもの方が、以下のような被害を受けるリスクが高い：

- 皮膚が薄くデリケートなため、より深く、より早く、より低い温度で燃えることにより、火傷で死亡する
- 身体が相対的に小さいため、爆風による負傷で死亡する
- 急速に成長・分裂する細胞が多く、放射線の影響を著しく受けやすいため、急性放射線症で死亡する
- 倒壊した建物や燃えている建物から身を離すことができず、また、生存の可能性を高めるような措置をとることができない
- 細胞への放射線損傷の遅発性影響の結果として白血病、固形がん、脳卒中、心臓発作、その他の病気にかかる
- 攻撃を受けた後に生活に困窮したり、精神障害や自殺にさえつながる心理的トラウマに苦しんだりする

さらに、核攻撃を受けたときに母親の胎内にいた赤ちゃんは、以下のリスクが高い：

- 出生直後または幼児期の死亡
- 発達中の脳が放射線障害に対して脆弱であることから、知的障害を伴う小頭症
- その他の発達異常
- 甲状腺機能低下による成長障害
- 小児期あるいは大人になってからのがんやその他の放射線関連疾患

このような恐ろしい現実には、現在核兵器を保有している国や、軍事同盟の一環として核兵器の保持を支持している国の政策決定に、重大な影響を与えるはずである。

それはまた、子どもたちの保護と子どもの権利促進を目的とする団体に、核兵器がもたらす深刻な世界的脅威に対処するための活動を促すはずである。

子どもたちは核兵器の開発にまったく関与していないにもかかわらず、将来核兵器が使用された場合にもっとも苦しむのは、子どもたちである。それは、このような破滅的兵器が緊急に廃絶されなければいけないということの、また一つの理由である。